

## 特別講演

主催 埼玉医科大学卒業教育委員会 ・ 後援 埼玉医科大学医学教育センター

平成17年11月13日 於 埼玉医科大学第三講堂, 総合医療センター大講堂  
(テレビ会議システムを使用)

## 医学教育におけるPBLチュートリアル教育の現状と問題 — 東京女子医科大学における取り組み —

吉岡 俊正

(東京女子医科大学・医学部・医学教育学講座)

PBL (Problem based learning) チュートリアル教育とは、学習者が事例から発見した問題を自ら解決して行くことを学ぶ教育と、チュータ(教員)の助言のもとで少人数グループ討論を経て学習を深めていく教育とを合わせた教育方法である。

日本では1990年に東京女子医科大学が最初に導入し、近年急速に広がり2004年度の全国調査では約2/3の医科大学が何らかの形でPBLチュートリアル教育を採用していることが報告されている。現在東京女子医科大学では1学年から4学年で継続してPBLチュートリアルが行われている。

卒業生への調査では、PBLチュートリアル教育を受けた卒業生は導入前の卒業生に比べ、在学中に論理的思考を培うことが出来たことや、研修医終了時点で問題の自己解決が行なえたと評価した人が多かったことが明らかになっている。これらのことからPBLチュートリアル教育が学習へのモチベーションを高め、論理的思考力を発達させる可能性が示唆された。

PBLチュートリアルは事例から問題点を見つけ出す力や、事例に合わせた問題解決能力など医師に求められる思考力開発に適した教育法とされる。学生には能動的参加が求められ、教員には教え込む教育から学び取らせる教育への教育技術の転換が必要である。PBLチュートリアル導入に際して学生の学習姿勢に頼る教育の脆弱性を危惧する声もある。

PBLチュートリアルには4つの要素があり、それぞれの要素が機能しないと危惧が現実となる。4つの要素とは、学生、グループ、チュータ、課題である。東京女子医科大学では各要素について工夫し改良を行なっている。すなわち、学生には入学者選抜時から自己開発型学習への動機を高める働きかけを行なってグループ討論を円滑に行うための環境を整えるとともに、チュータには1泊2日でセミナーを行い、能力開発の場 (Faculty development) としてチュータ支援体制を整備している。また学内に組織されたチュートリアル委員が中心となって課題作成を行い、豊富な課題の供給が可能となっている。

東京女子医科大学では継続的にPBLチュートリアル教育の改良を行っている。そのひとつは学年が進むにつれて学習技術と思考力を深めることを目的とした「累進型PBLチュートリアル」である。また、医師としての態度・習慣を含む人間性教育を包含したPBLチュートリアルを開発し実践している。さらに、PBLチュートリアルの学生評価としてチュータによる評価に加えて、問題解決・臨床推論能力を評価する試みが進められている。

質の高い教育実践のためにPBLチュートリアルの導入、維持、改良は教育機関全体で取り組む必要がある。  
(文責 有田和恵)